

大学生の心理的コミュニティ感覚: 日本と韓国の異文化間比較^{i, ii}

A Cross-Cultural Study on the Psychological Sense of Community in Japanese and Korean Contexts

池田 満 IKEDA, Mitsuru

● 国際基督教大学大学院
Graduate School of Education, International Christian University

Keywords 心理的コミュニティ感覚, 異文化間妥当性, 集団主義, 民族アイデンティティ
Psychological sense of community, cross-cultural validity, collectivism, ethnic identity

ABSTRACT

心理的コミュニティ感覚 (PSOC) は, McMillan & Chavis (1986) が4因子構造の尺度を作成以降, 主として欧米文化圏内で盛んに研究が行われている。しかし文化的コンテクストの違いがPSOCに与える影響については従来ほとんど研究されていなかった。そこで本研究では, 日本と韓国の大学生を対象とした比較文化研究の視点から, 1) PSOCの異文化圏における因子的妥当性, 2) 文化的価値観の一側面である集団主義傾向, および民族アイデンティティとPSOCとの関連の二点について検討を行った。確認的因子分析の結果, 両国ともMcMillan & Chavis (1986) の4因子構造は妥当であり, PSOCが文化を越えて適用可能な概念である可能性が示唆された。しかし両国の大学生が示した文化的相違は回答者が感じているコミュニティ感覚と強く関係があり, 文化に根ざしたPSOC研究の重要性が示された。

Despite a great deal of research efforts since McMillan & Chavis' work (1986) on measuring psychological sense of community (PSOC), few studies have investigated the role of cultural contexts. However, there is growing evidence to show consistent effects of cultural backgrounds of a community and its members on PSOC because certain psychological concepts involving cultural characteristics (e.g., collectivism, cultural-ethnic identity) are directly and indirectly associated with community characteristics and member attributes (cf. Triandis, 2001). Ikeda & Sasao (2003) reported that a higher level of collectivism was associated with lower PSOC among Japanese respondents. The purpose of this cross-cultural study was to investigate the effects of the cultural contexts of communities on PSOC. Data were collected from college students in Japan and Korea, who were supposed to show some clear cultural contrasts on certain cultural variables. While Japan and Korea share the similar cultural traditions (e.g., Confucianism), these two nations have distinct current cultural values. Thus, contrasting culturally similar but different communities was expected to provide unique implications for cross-cultural studies on PSOC. The survey scales included the ICU-SOC Scale (Koyama et al., 2002), the Collectivism Scale (Yamaguchi, 1995), and Multigroup Ethnic Identity Measure (Phinney, 1992). The results indicated that the cultural differences among college students in two nations were substantially associated with the PSOC, while their effects varied depending on their cultural characteristics.

問題

現代における様々な心理・社会的問題に対してコミュニティ心理学の観点から理解し、問題の解決、予防への介入を考える上で、心理的コミュニティ感覚 (Psychological Sense of Community) は最も重要かつ不可欠な概念の一つである (Sarason, 1974)。他方、コミュニティ心理学は主に欧米で発展し、研究、実践が進められてきたという背景から、研究成果について日本を含めたアジアなど他の文化的地域での適用可能性に関する考察、言い換えれば異文化間妥当性 (cross-cultural validity: Sasao & Yasuda, 2004) の検討はあまり行われてこなかった。本研究ではコミュニティ感覚について、欧米で得られている研究結果が文化の差を越えて適応可能であるかどうかを考える一端として、コミュニティ感覚の異文化間妥当性について日本と韓国の比較研究から検証する。

心理的コミュニティ感覚の定義 心理的コミュニティ感覚を定義するに先立ち、Sarason (1974) は広くコミュニティ心理学が扱う対象となるべきコミュニティの定義を、「ある人にとって、すでにそこに存在し、互恵的関係を築くことができる対人ネットワーク (p.1)」と述べている。そうしたコミュニティに対して抱く心理的コミュニティ感覚の定義として、1) 他者との類似性の知覚していること、2) 他者との承認的相互依存関係を持つこと、3) その相互依存関係を積極的に維持しようとする気持ち、4) 自分はある大きな依存可能な安定した構造の一部であるという感情 (p.175) の4点を挙げている。

その後、心理的コミュニティ感覚はコミュニティ心理学の分野に留まらず、社会学や文化人類学などの分野で、コミュニティへの満足感 (Community Satisfaction)、コミュニティの凝集性 (Community Cohesiveness) などの概念として研究が進められた (e.g., Bardo & Bardo, 1983)。McMillan & Chavis (1986) はこれらの諸分野における研究のレビューから、心理的コミュニティ感覚についてSarason (1974) の定義に近似した以下のような定義を導き出した。

(集団の) 成員が持つ所属感、成員が成員相互、あるいは集団に対して持っている重要性の感覚、集団に関わることによって成員のニーズを満たすことができるという信念。(McMillan & Chavis, 1986)

さらにMcMillan & Chavis (1986) は、心理的コミュニティ感覚は他の概念と同様に心理学的に測定可能であるとして、次の4側面からなる尺度 (Sense of Community Index: SCI) を作成した。

- 1) メンバーシップ: コミュニティの境界についての認識、情緒的安全感、所属感、コミュニティに対する個人の物的、心的投資などの感覚を統合して、誰がコミュニティのメンバーであり、誰がメンバーでないかを決定すること。
- 2) 影響: コミュニティの各メンバーが、コミュニティに対して何らかの力を行使できる、またコミュニティが個人に対してコミュニティへの同調を求める力を持っているという感覚。さらに同調性、同一性を求める力が、個人やコミュニティが持つ同意に基づく相互承認への欲求から生まれていること。そしてこれらの力のやり取りが個人とコミュニティとの間に双方向的に存在していること。
- 3) 結合とニーズの充足: 人-環境適合の結果として、コミュニティのメンバー同士の物理的、心理的ニーズが共有され、コミュニティの中で、そのニーズを満たす場が提供されること。
- 4) 共有された情緒的結合: コミュニティのメンバー同士が歴史、時間、場所、経験を共有することによって、メンバー間での積極的な交流が求められ、コミュニティへの物的、心的投資が推奨され、その結果として強い精神的なつながりを体験すること。

McMillan & Chavis (1986) が作成したSCIは上記の4側面についてそれぞれ3項目、合計12項目からなり、その後の心理的コミュニティ感

覚研究で頻繁に採用され、あるいは新規尺度の基礎となっている (e.g., Obst et al., 2002). しかしSCIの尺度構造は理論的考察から導き出されたものであり、心理測定学的に妥当であるかどうかの議論が長く行われていた. このことについてLong & Perkins (2003) や Ikeda (2004) は検証的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis: CFA) を用いた研究から、4 因子構造は十分に妥当であるという結果を導き出している.

SCIやその他によって測定される心理的コミュニティ感覚はこれまで、様々な心理、社会的変数との関係性が指摘されている. 例えば地理的コミュニティを対象とした研究では、地域に対するコミュニティ感覚が高い住民は、人生に対する満足感 (Prezza & Costantini, 1998) や主観的幸福感 (Davidson & Cotter, 1990) が高く、逆にコミュニティ感覚が低い住民は、高い孤独感 (Pretty, Andrew & Collett, 1994) を感じている. また学校や大学などの教育現場での研究からは、生徒のコミュニティ感覚が高い学校では中途退学率が低く (Royal & Rossi, 1996), 学業成績が高い (Pretty, 1990). また違法薬物使用などの問題行動発生率の低さも指摘されている (Battistich & Hom, 1997). さらに地域社会における社会的変数との関連では、高いコミュニティ感覚を持つ住民は地域施策に積極的に参加し、投票率が高い (Davidson & Cotter, 1986) という結果も得られている.

ここまで述べたようにコミュニティ感覚を高めることは、種々のコミュニティにおける問題を解決するにとどまらず、問題の予防、さらにはよりよいコミュニティを作り上げるために大きな役割を果たすことが期待される. しかしコミュニティ感覚を高める要因については、まだ不明の部分が多い. 相対的に人口が少なく人口密度が小さいコミュニティに住む住民はコミュニティ感覚が高いこと (Prezza & Costantini, 1998), あるいは地域への居住年数や、社会的集団への所属期間が長いこととコミュニティ感覚の高さとの関連 (Pretty, Andrew & Collett, 1994; Prezza, Amici, Roberti & Tedeschi, 2001) など、主

として人口統計学上の変数との関係が指摘されているが、いずれも公共施策やプログラムとしてコミュニティ感覚を高める方法としては活用しづらい. さらに大きな問題として、ここまで挙げた研究はすべてアメリカやヨーロッパ諸国など欧米文化圏で行われてきたものであり、日本を含めたアジア文化圏との間の異文化間妥当性 (Sasao & Yasuda, 2004) についてはあまり検討が行われていない. 日本においては、植村 (1984) や石盛 (2004) などが日本独自の「コミュニティ意識」として研究を行っているが、欧米での研究との斉一性については言及していない. Sasao & Ikeda (2004) は日本にあるインターナショナルスクールに通う高校生と一般の日本の高校に通う高校生との比較を行い、Sarason (1974) やMcMillan & Chavis (1986) の概念定義に基づくコミュニティ感覚が、日本においても十分に妥当であるという手がかりを得ている. しかし日本が、アジアという、それ自体が文化的多様性を内包するコンテクストを代表するものではなく、より広い観点からの議論が必要である.

日本と韓国の文化的土壌 日本と韓国は、その地理的、歴史的関係から、きわめて似通った文化的土壌を有している. しかし欧米の研究者による比較研究 (e.g., Smith & Bond, 1998) から、日本と韓国の文化には、数々の相違点があることが指摘されている. 日本社会の特色を現す表現として“甘え” (Smith & Bond, 1998) が挙げられる. Smith & Bond (1998) によると、甘えとは寛大さを伴う依存関係 (Indulgent Dependence) を意味し、社会生活を遂行するために永続的で極めて親密な信頼関係を求め続けることを意味している. 甘えの基本は母子関係を根に持つ関係性であり、そこから発展した社会的対人関係は「家族様関係性 (Family-Like Relationship)」の様相を呈する. 多様な対人関係に対して家族関係を表現する言葉が当てはめられること (親分-子分, 店子など) からわかるように、対人関係に家族的なかたちを求めようとする傾向が見られる.

これに対してSmith & Bond (1998) によると韓国社会は、「家族関係 (Family-Based Relationship)」を志向しているとしている。韓国では血族を基礎とする家族関係が人間関係で最重要視され、ついで祖先を共にする血族、地族関係が重要な人間関係とされている。また家族重視の思想は儒教文化の影響を色濃く受けたものであり、そこからさらに長幼の序の重視へとつながる (Choi, Kim, & Kim, 1997; Kim, & Kim, 1997; Kim, Cho, & Harajiri, 1997)。儒教思想は日本の対人関係の根底にも存在するものであるが、韓国ではより強く身近であると考えられている (Kim, Cho, & Harajiri, 1997)。

上記のように日本と韓国では社会における対人関係のあり方として、非常に近似しているながらも異なる文化的土壌を有している。心理的コミュニティ感覚は対人関係に関する肯定的な感情を意味する概念 (Fisher, Sonn, & Bishop, 2002) であり、こうした文化的背景の持つ影響が予測される。本研究では、文化的土壌と心理的コミュニティ関係との関係を集団主義傾向と民族アイデンティティの側面から捉え、文化差がコミュニティ感覚に対して持つ影響を検討を行う。

集団主義傾向は、従来は欧米型文化圏とアジア型文化圏との対比を象徴する概念として研究が行われてきたが、近年では近似とされているアジア型文化圏内においても差異が見られる概念 (Oyserman, Coon & Markus, 2002) として、新たに注目を集めている。Oyserman, Coon & Markus, (2002) によると、日本人はアメリカ人と比較してより集団主義傾向が弱く、また韓国人の方がアメリカ人よりも集団主義的傾向が強いと言われている。Yamaguchi (1994) によれば、集団主義文化の代表とされていた日本文化が、内在化された集団主義的価値観によるものではなく、集団主義的行動を求める社会的圧力によるものであるとされており、このことが低い集団主義傾向を示す要因であると考えられる。また他者との家族的関係を保つ必要性がある日本人に対して、韓国ではすでに元来血縁関係にある家族との関係性が強調されるため、外的圧力

による集団主義維持の必要性はより低いと思われる。心理的コミュニティ感覚はコミュニティへの主体的な関心を表す感情であり、外的な圧力による集団主義傾向とは負の関係にあると予測される。また民族アイデンティティについては、池田 (2005) によるマレーシアでの調査によると、マレーシア国民を構成する主要民族である中国系、マレー系、インド系との間で、心理的コミュニティ感覚と民族アイデンティティとの関係に顕著な差が見られ、中国系、マレー系住民では有意な相関が見られたものの、インド系住民ではほぼ無相関であった。本研究で対象とする日本と韓国は、いずれも国内に大きな複数の民族グループを有してはいないが、国家間比較の手がかりとしても有用である可能性が大きい。

以上から本研究では、第一に日本と韓国というともにアジア文化圏にある二国間において、これまで欧米で見られたのと同様に心理的コミュニティ感覚が見られるのかを検討し、心理的コミュニティ感覚の異文化間妥当性検証の手がかりを得ることを目的とする。第二に、それぞれの国の持つ文化的背景の相違が心理的コミュニティ感覚とどのような関係にあるのかを考察する。

方法

回答者および調査方法 2003年から2005年にかけて日本と韓国の大学に通う大学生を対象に、質問紙による調査を実施した。質問紙の配布および回収は大学の講義時間内に、その講義の担当教員によって実施された。その際、授業の内容および成績などとは無関係であり、調査への参加を拒否する権利があることが伝えられた。

日本の調査では首都圏の大学に通う学生76名、中国地方の都市部に所在する大学に通う学生108名、また韓国の調査ではソウル市内の大学に通う学生100名から回答を得られた。回答者の属性についてはTable 1を参照。

Table 1. Demographic Characteristics of Respondents

Characteristics	Japan (N=184)		Korea (N=100)	
	n	%	n	%
Sex				
Male	77	41.8	52	52.0
Female	107	58.2	48	48.0
Grade				
1	134	72.8	26	26.0
2	30	16.3	30	30.0
3	15	8.2	14	14.0
4	5	2.7	18	18.0
Age				
>19	-	-	9	9.0
20	-	-	22	22.0
21	-	-	17	17.0
22	-	-	15	15.0
23	-	-	6	6.0
24	-	-	10	10.0
25	-	-	15	15.0
26<	-	-	6	6.0

尺度 年齢、性別などの人口統計的項目を含め全8ページからなる自己報告形式の質問紙を、日本語、韓国語両言語について作成した。本研究で使用した尺度は下記の3つである。なおこれらの尺度はすべて、「よく当てはまる」から「全く当てはまらない」までの6件法で回答を求めた。

1) 心理的コミュニティ感覚尺度

小山・池田・笹尾(2002)が作成した日本語版コミュニティ感覚尺度を使用した。この尺度は、McMillan & Chavis(1986)によるSCIの4因子(共有された情緒的つながり、影響、統合とニーズの充足、メンバーシップ)に対応する4因子1)結びつきと友好(例:先生や他の学生と強い繋がりを感じる)、2)影響(例:この大学の行政部は、学生の意見に耳を傾ける)、3)サポート(例:先生や他の学生が何かよいことをしたら、私も気分がよい)、4)所属(例:大学にいます、居心地がよく落ち着く)から構成されている。韓国語版項目については、日本語版との等質性、信頼性、および妥当性が確認されている英語版尺度(笹尾・小

山・池田, 2003)を、バックトランスレーション法を用いて韓国語に翻訳し、さらに日本語版尺度との内容の照合を行った。

2) 文化的変数

文化的変数を測定するために、以下の2つの尺度を使用した。

集団主義 Yamaguchi, Kuhlman, & Sugimori(1995)が作成した集団主義尺度を使用した。この尺度は、集団主義傾向を測定する5項目(例:自分の友人集団の決定を尊重する)と、逆転項目として個人主義傾向を測定する9項目(例:友人集団の仲間がどう思おうと、私は自分のやり方でものごとを行う)、合計14項目から構成されている。本研究では、Yamaguchi, Kuhlman, & Sugimori(1995)が日本と韓国の比較研究を行った際に使用した日本語版と韓国語版の尺度を使用した。**民族アイデンティティ** Phinney(1992)が作成した12項目からなるMultigroup Ethnic Identity Measure (MEIM)を使用した。この尺度は民族アイデンティティの探求因子5項目(例:人生が自分の文化・民族にどのように影響されるかをよく考える)と、民族アイデンティティの確認、所属、関与因子7項目(例:自分の文化・民族に強い愛着を感じる)から構成されている。本研究では英語版尺度をバックトランスレーション法により、それぞれ日本語と韓国語に翻訳したものをを使用した。

結 果

分析に当たり、被験者ごとに各尺度因子の項目得点の平均値を算出し、その被験者の因子得点とした。算出された各尺度の平均値、および標準偏差をTable 2に示す。心理的コミュニティ感覚尺度内の所属感因子(日本: $M=3.70$, $SD=.75$; 韓国: $M=4.01$, $SD=.68$)と、集団主義尺度得点(日本: $M=3.44$, $SD=.52$; 韓国: $M=3.73$, $SD=.50$)を除き、日本と韓国の回答者間の平均値に大きな差は見られなかった。独立サンプル

の t 検定を行ったところ所属感因子 ($t(281) = 3.48, p = .000, d = .42$) と集団主義尺度得点 ($t(281) = 4.38, p = .000, d = .52$) について、日本の回答者の方が韓国の回答者と比較して有意に低かった。

因子構造の検討 心理的コミュニティ感覚の、二国間での因子構造の共通性を検討することを目的に、AMOS 4.02による確認的因子分析を行った (Table 3)。McMillan & Chavis (1986) による4因子モデルについて分析を行ったところ、モデルの適合度を示す指標は両国とも十分に高く (日本: CFI=.967, IFI=.962; 韓国: CFI=.930, IFI=.931), 4因子構造はいずれの国においても当てはまりがよいことがわかった。しかし、個々の因子への負荷量を示す標準化係数を見ると、結びつき、サポート、所属感因子では両国に大きな差は見られないものの、影響因子は5%水準で日本 (.75) の方が韓国 (.57) よりも有意に高かった。

文化的変数との関係 心理的コミュニティ感覚と文化的変数との関係を検討するために、集団主義、民族アイデンティティと、心理的コミュニティ感覚の全体および下位因子間の相関係数を求めた (Table 4)。集団主義と心理的コミュニティ感覚の間には有意な相関も見られたが、いずれの係数も非常に低い値を示し、コミュニティ感覚と集団主義の間にはほとんど相関がないことがわかった。一方、民族アイデンティティの間には、韓国の回答者においては弱いながらも一貫して有意な相関が見られた ($r = .33-.46$)。しかし日本の回答者においては、韓国と比較してほとんど相関が見られなかった。

考 察

本研究では因子的妥当性の観点から、確認的因子分析の手法を用いて、日本と韓国における

Table 2. Mean Differences for Variable Measured in Two Nations

Variables	Japan (183)		Korea (100)		$t(281)$	d
	M	SD	M	SD		
Sense of Community	3.83	.62	3.96	.58	1.63	.19
Ties & Friendship	3.96	.70	3.90	.62	.71	.08
Influence	3.77	.94	3.86	.78	.77	.09
Support	3.86	.80	4.00	.69	1.54	.18
Belonging	3.70	.75	4.01	.68	3.48**	.41
Collectivism	3.44	.52	3.73	.50	4.38***	.52
Ethnic Identity	3.49	.87	3.49	.71	.00	.00

** $p < .01$ *** $p < .001$

d : Cohen's effect size d

Table 3.

Standardised Solutions by Confirmatory Factor Analysis and Goodness-of-Fit Indices for the Psychological Sense of Community

	Factor Loadings				Goodness-of-fit Indices			
	Ties	Influence ^{a)}	Support	Belonging	df	χ^2	CFI	IFI
Japan	.76	.75	.85	.73	2	12.608	.967	.962
Korea	.88	.57	.87	.86	2	18.301	.930	.931

^{a)} Factor loadings are significantly different at 5% level.

心理的コミュニティ感覚の概念構造の比較を行った。McMillan & Chavis (1986) の提唱する理論的4因子モデルは、過去に多くの研究でその妥当性が確認されているが、本研究では、日本と韓国においてもそのモデルが十分に妥当であるという結果が得られた。このことは、他の研究 (e.g., 池田, 2005) などとあわせ、欧米文化圏に留まらず、広くコミュニティ感覚が適用可能な概念であることを示唆している。

因子構造が妥当である一方で、日本人回答者は韓国人回答者と比べ所属の意識が低かった。これは韓国人が家族的つながりを一義的に捕らえ、職場や学校などは二次的な関係性であるとする従来の文化間研究の結果 (Choi, Kim & Choi, 1993, p.199; Han & Choi, 1993, p.222) と矛盾するものではない。心理的コミュニティ感覚は、集団への単純な所属意識と情緒的なつながりを区別して捉えているが、情緒的なつながりに関しては韓国人回答者と日本人回答者では差が見られておらず、かならずしも韓国人回答者が高いわけではない。これまで一意に所属感としてきたものが、コミュニティ感覚によって、単純な集団への所属 (Belongingness) と情緒的なつながり感 (Emotional Connectedness) と区別してとらえたことにより、より明確にされたのであろう。また韓国人回答者において、影響因子がコミュニティ感覚にもつ意味が相対的に低かった。儒教思想に基づく長幼の序がいまだに重要な社会規範とされる韓国社会 (Choi, Kim, & Kim, 1997; Kim, & Kim,

1997; Kim, Cho, & Harajiri, 1997) においては、自分よりも上位に位置すると考えられる教員や大学組織に対して影響力を持つことを求めるという考え方が存在しない可能性がある。

本研究の目的の二点目として、文化的変数とコミュニティ感覚との関係性を検討した。集団主義傾向とコミュニティ感覚の間には日本、韓国の回答者ともにあまり強い関係は見られなかった。しかし日本人回答者では一貫して負の関係が見られたのに対して韓国人回答者では一貫して性の関係が見られるという傾向は興味深い。コミュニティ感覚は集団主義的な行動とは基本的にはあまり関係はないものの、日本人のように集団主義が内在化されていない、つまり外的圧力の結果としての集団主義とコミュニティへの主体的積極的関与を表すコミュニティ感覚は相反するものであるが、集団主義的価値観が内在化されている場合には、すなわち主体的に集団主義的傾向を示す場合にはコミュニティ感覚と矛盾を生じさせないという示唆が得られた。

また本研究では探索的に民族アイデンティティとコミュニティ感覚との関係を探索的検討課題として設定したが、池田 (2005) に見られたような同一国内の民族間のような明確な差は見られなかったものの、日本人回答者に比べて韓国人回答者のほうが一貫して強い関係が見られた。集団主義的傾向という内在化された価値観は文化、民族的価値観の一つの形であり、韓国人回答者の集団主義傾向がより高いコミュニテ

Table 4. Correlations for the PSOC and the Cultural Variables

Variables	PSOC	Ties	Influence	Support	Belonging
Japan (<i>n</i> =183)					
Collectivism	-.26***	-.17*	-.08	-.23	-.29***
Ethnic Identity	.30***	.26***	.27***	.20	.25**
Korea (<i>n</i> =100)					
Collectivism	.21	.16	.01	.30**	.23
Ethnic Identity	.46***	.40***	.33**	.41***	.41***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

イ感覚へと結びつく手がかりとなる。

今後の課題としては、第一に学校コミュニティという特殊なコミュニティ形態要因を考えなければならない。コミュニティの形態には大きく地理的コミュニティと関係性コミュニティがあるが (Dalton, Elias, & Wandersman, 2002), いずれの形態にも共通の性質は、成員間の関係が相対的に決定されるという点である。地理的コミュニティで見れば誰かの隣人は同時に相手の隣人であり、また関係性コミュニティの例を会社組織に見ると、誰かの上司は同時に誰かの部下である。しかし学校というコミュニティは、基本的に教員や事務行政職員を主体とするある程度固定的な組織形態の中で、学生という流動的の成員が出入りする形式をとっており、一つの学校の中で誰かの学生が同時に誰かの教員であるということは、まずない。影響力を行使することによって直接的に成員間の関係性の変容を見込むことができないコミュニティと、影響力が成員間の関係性変容をもたらさうるコミュニティとの間の差異が、コミュニティ感覚にどのような影響を与えうるか考察する必要がある。

また本研究は大学のみを調査対象としたが、コミュニティとは地理的、関係性、いずれも多様な様相を想定しうる概念である。それぞれのコミュニティに独自のコミュニティ感覚があり、そのもつ意味にも様々である。そしてそれら多様なコミュニティにおけるコミュニティ感覚研究もまた、いまだ欧米中心で、比較文化的観点からの研究はほとんど行われていない。同時に本研究ではコミュニティ感覚が欧米的文化圏だけでなく、アジアにおいても妥当性のある概念であることの証拠の一端が得られたが、このことが即ちコミュニティ感覚が文化を越えて普遍性のある概念であることを意味するものではない。様々な側面における多様なコミュニティにおけるコミュニティ感覚の比較検討が、コミュニティ感覚の異文化間妥当性の確認に必要である。

今後は、上記のようなコミュニティ感覚に関する基礎研究を継続するとともに、心理、社会

的問題の予防の方略としてのコミュニティ感覚という観点から、どのようにしてコミュニティ感覚を高めていくことが可能であるか、またコミュニティ感覚には、内集団ひいきのような負の側面はないのか、実践研究を進めていく必要がある。そうした実践にむけて本研究から、文化に根ざした (Culturally-anchored) コミュニティ感覚促進プログラムの必要性に対する示唆が得られたと考える。

引用文献

- Bardo, J. W., & Bardo, D. J. (1983). A re-examination of subjective components of community satisfaction in a British new town. *The Journal of Social Psychology, 120*, 35-43.
- Battistich, V., & Hom, A. (1997). The relationship between students' sense of their school as a community and their involvement in problem behaviour. *American Journal of Public Health, 87*, 1997-2001.
- Brodsky, A. E., & Marx, C. M. (2001). Layers of identity: Multiple psychological sense of community within a community setting. *Journal of Community Psychology, 29*, 161-178.
- Choi, S. A., Kim, U., & Choi, S. H. (1993). Indigenous analysis of collective representations: A Korean perspective. In Kim, U. & Berry, J. W. (Eds.), *Indigenous psychology*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Choi, S. C., Kim, U., & Kim, D. D. (1997). Multifaceted analyses of *Chemyon* ("social face"): An indigenous Korean perspective. In Leung, K. Kim, U. Yamaguchi, S. & Kashima Y. (Eds.). *Progress in Asian Social Psychology* (pp. 3-22). NY: Wiley & Sons.
- Davidson, W. B., & Cotter, P. R. (1986). Measurement of sense of community within the sphere of city. *Journal of Applied Social Psychology, 16*, 608-619.
- Fisher, A. T., Sonn, C. C., & Bishop, B. J. (Eds.). (2002). *Psychological sense of community: Research, applications, and implications*. NY: Kluwer Academic.
- Han, G., & Choe, S. M. (1994). Effects of family, region, and school network ties on interpersonal intentions and the analysis of network activities in Korea. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kâğitçibaşı, S. C. Choi & G. Yoon (Eds.), *Individualism and*

- collectivism: Theory, method, and applications. Thousand Oaks, CA: Sage.
- Ikeda, M. (2004). *The role of cultural context in understanding psychological sense of community among Japanese college students*. Unpublished master's thesis, International Christian University, Tokyo, Japan.
- 池田満 (2005). 日本版コミュニティ感覚尺度 (ICU-SOC Scale)の異文化間妥当性の検討: 日本とマレーシアの高校生における調査から 日本コミュニティ心理学会第8回大会発表論文集 pp. 38-39.
- 石盛真徳 (2004). コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加: コミュニティ意識尺度の開発を通じて コミュニティ心理学研究, 7, 87-98.
- Kim, K., & Kim, U. (1997). Conflict, ingroup and outgroup distinction and mediation: Comparison of Korean and American students. In Leung, K. Kim, U. Yamaguchi, S. & Kashima Y. (Eds.). *Progress in Asian Social Psychology* (pp. 247-260). NY: Wiley & Sons.
- Kim, U., Cho, W. C., & Harajiri, H. (1997). The perception of Japanese people and culture: The case of Korean nationals and sojourners. In Leung, K. Kim, U. Yamaguchi, S. & Kashima Y. (Eds.). *Progress in Asian Social Psychology* (pp. 321-344). NY: Wiley & Sons.
- 小山梓・池田満・笹尾敏明 2002 日本語版「コミュニティ感覚」尺度 (ICU-SOC Scale)作成の試み: ミクロ-マクロ・レヴェルアプローチ 日本コミュニティ心理学会第5回大会発表論文集, pp. 54-55.
- Long, D. A., & Perkins, D. D. (2003). Confirmatory factor analysis of the sense of community index and development of a brief SCI. *Journal of Community Psychology*, 31, 279-296.
- McMillan, D. W., & Chavis, D. M. (1986). Sense of community: A definition and theory. *Journal of Community Psychology*, 14, 6-23.
- Obst, P., Zinkiewicz, L., & Smith, A. G. (2002). Sense of community in science fiction fandom, part 1: Understanding sense of community in a international community of interest. *Journal of Community Psychology*, 30, 87-103.
- Oyserman, D., Coon, H. M., & Markus, K. (2002). Rethinking individualism and collectivism: Evaluation of theoretical assumptions and meta-analyses. *Psychological Bulletin*, 128, 3-72.
- Phinney, J. (1992). The Multigroup Ethnic Identity Measure: A new scale for use with adolescents and young adults from diverse groups. *Journal of Adolescent Research*, 7, 156-176.
- Pretty, G. M. H. (1990). Relating psychological sense of community to social climate characteristics. *Journal of Community Psychology*, 18, 60-65.
- Pretty, G. M. H., Andrew, L., & Collett, C. (1994). Exploring adolescents' sense of community and its relationship to loneliness. *Journal of Community Psychology*, 22, 346-358.
- Prezza, M., & Costantini, S. (1998). Sense of community and life satisfaction: Investigation in three different territorial contexts. *Journal of Community & Applied Social Psychology*, 8, 181-194.
- Prezza, M., Amici, M., Roberti, T., & Tedeschi, G. (2001). Sense of community referred to the whole town: Its relations with neighbouring, loneliness, life satisfaction, and area of residence. *Journal of Community Psychology*, 29, 29-52.
- Royal, M. A., & Rossi, R. J. (1996) Individual-level correlates of sense of community: Findings from workplace and school. *Journal of Community Psychology*, 24, 395-416.
- Ryff, C. D. (1989). Happiness is everything, or is it?: Exploration on the meaning of psychological well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 1069-1081.
- Sarason, S. B. (1974). *The Psychological sense of community: Prospect for a community psychology*. San Francisco: Jossey-Bass.
- 笹尾敏明・池田満・小山梓 (2003). 多文化的コンテクストにおけるコミュニティ感覚とウェルビーイング: McMillan & Chavis (1986) Modelの再考 日本コミュニティ心理学会第6回大会発表論文集, pp. 42-43.
- Sasao, T., & Ikeda, M. (2004, August). *The Role of Cultural Context in Understanding Psychological Sense of Community among Japanese College Students*. Paper presented at the 112th Annual Convention of the American Psychological Association, Honolulu, HI.
- Sasao, T., & Yasuda, T. (2004, February). *Historical and theoretical orientations of community psychology in Japan: Toward a culturally indigenous community psychology in the globalising world*. Paper presented at the First Japan-Korea Seminar in Community Psychology, Seoul, Korea.
- Smith, P. B., & Bond, M. H. (1998). *Social psychology across cultures* (2nd ed.). London, UK: Prentice Hall.
- Triandis, H. C. (2001). Individualism-collectivism and personality. *Journal of Personality*, 69, 907-924.
- 植村勝彦 (1984). 地域社会に対する住民の態度の類型化とその適用 (II) 山本和郎 (編著) コミュニティ心理学の実際 新曜社
- Yamaguchi, S. (1994). Collectivism among the Japanese: A perspective from the self. In U. Kim,

H. C. Triandis, C. Kâğıtçıbaşı, S. C. Choi & G. Yoon (Eds.), *Individualism and collectivism: Theory, method, and applications*. Thousand Oaks, CA: Sage.

Yamaguchi, S., Kuhlman D. M., & Sugimori, S. (1995). Personality correlates of allocentric tendencies in individualist and collectivist cultures. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 26

註：

- i 韓国でのデータ収集にあたり、延世大学の Yujin Moon 氏および Joo Sik Won 氏にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。
- ii 本研究は国際基督教大学21世紀COEプログラムの支援によって実施されました。